

ヨウダとソウダの主観性

杉 村 泰

1. はじめに

一般に日本語の文末表現「ニチガイナイ」¹⁾、「ヨウダ」²⁾、「ソウダ」²⁾、「ベキダ」などは、話し手の主観的な態度を表すモダリティ表現であるとされている。

- (1) a. 太郎が来るニチガイナイ。
b. 太郎が来るヨウダ。
c. 太郎が来ソウダ。
d. 太郎が来るベキダ。

この考えに従うと、(1)の各表現は「太郎が来るコト」という客観的な命題について、話し手が「ニチガイナイ」、「ヨウダ」、「ソウダ」、「ベキダ」という主観的な判断を下したものであるということになる。これを図1に示す。

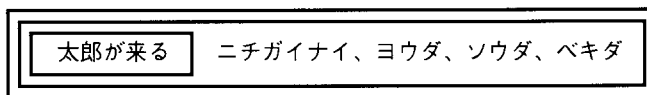


図1 従来考えられてきた文の構造

しかし、「ソウ」と「ベキ」は客観的な命題として機能していると考えたほうがよい。その証拠に「ニチガイナイ」と「ヨウ」が疑問の対象とならないのに対し、「ソウ」と「ベキ」は疑問の対象となる。疑問の対象となるということは、「ソウ」や「ベキ」が話し手の存在とは独立した客観的な事態³⁾を表していることを示している。

- (2) a. * [太郎が来るニチガイナイ] かどうかを考える。
b. * [太郎が来るヨウ] かどうかを考える。
c. [太郎が来ソウ] かどうかを考える。
d. [太郎が来るベキ] かどうかを考える。

こうした事実により、「ニチガイナイ」と「ヨウダ」がそれ全体でモダリティとして機能するのに対し、「ソウダ」と「ベキダ」は「ダ」の部分のみモダリティとして機能し、「ソウ」や「ベキ」の部分は命題として機能することが明らかとなる。したがって、(1a)と(1b)は「太郎が来るコト」という事態について「ニチガイナイ/ヨウダ」という概言的な判断をした表現であり、(1c)と(1d)は「太郎が来ソウナコト」、「太郎が来るベキコト」について「ダ」という確言的な判断をした表現であるということになる。このことを図2に示す。

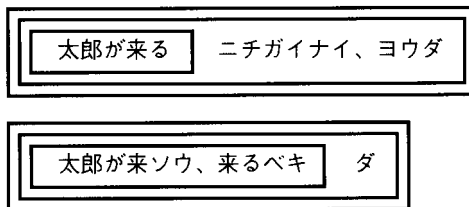


図2 本研究で考える文の構造

以上の表現のうち、本稿では「ヨウダ」と「ソウダ」の主観性の違いについて考察する。なお、「ニチガイナイ」と「ベキダ」については稿を改めて論じることにする。

2. 主観性

2.1 命題とモダリティ

主観性ということばは多義に使われるが、本研究では、モダリティ論における話し手の心的態度の現れについて用いることにする。モダリティ論によると、一つの文は、話し手が切り取った客体世界の事態を描く「命題」と、発話時点における話し手の心的態度を表す「モダリティ」から成り立つと考えられる。⁴⁾「モダリティ」はさらに、話し手による客体世界の把握の仕方と関わる「命題態度のモダリティ」と、話し手の発話態度と関わる「発話態度のモダリティ」とに分けられる。⁵⁾図3は発話態度のモダリティの中に命題態度のモダリティが埋め込まれ、さらにその中に命題が埋め込まれる様子を示している。

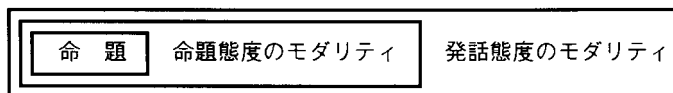


図3 文の構造

このことを具体的な表現で説明する。

(3) [[[雨] だ] よ]

(4) [[[かなり雨が降る] だろう] ね]

例文(3)(4)で命題に相当するのは「雨(である)コト」と「激しい雨が降るコト」の部分である。これらは話し手の存在とは独立に客体世界に存在するものであるため、客観的な命題として機能する。これに対し、モダリティに相当するのは「だ」、「よ」、「だろう」、「ね」の部分である。このうち命題態度のモダリティに相当するのは「だ」と「だろう」の部分である。これらは「雨(である)コト」、「かなり雨が降るコト」という事態に対して、話し手が確言(「だ」)や概言(「だろう」)の判断を下したものである。一方、発話態度のモダリティに相当するのは「よ」と「ね」の部分である。これらは「雨だ」、「かなり雨が降るだろう」という判断を、話し手から聞き手への情報提供(「よ」)として伝えたり、話し手と聞き手の情報の共有(「ね」)として伝えたりする機能がある。これらの表現は、話し手の心的態度に依存する表現であるため、主観的なモダリティとして機能するのである。

ここで注意しておきたいのは、(3)で空から落ちてくる水滴を「みぞれ」や「雪」ではなく「雨」と捉えたり、(4)で雨の激しさを「相当」や「ずいぶん」ではなく「かなり」と捉えたりするのも、話し手の主観によると言えなくもないということである。しかし、これらの表現は話し手が客体世界の事態として切り取ったものであるため、本研究では客観的な成分であると考えられる。

2.2 命題とモダリティの分類基準

次に命題とモダリティの分類基準について論じる。モダリティは発話時点における話し手の心的態度を表すため、それ自体は真偽の対象とならず、連体修飾成分にもならず、過去文の対象にもならないという性質をもつ。一方、命題にはこうした制限が加わらない。そこで本研究では、命題とモダリティの分類基準として、否定の対象になるかどうか(否定テスト)、疑問の対象になるかどうか(疑問テスト)、連体修飾成分になるかどうか(連体修飾テスト)、過去文の対象になるかどうか(過去テスト)の4つの「主観性判定テスト」を実施する。これらのテストで適格と判断されるものは命題に属し、不適格と判断されるものはモダリティに属すと考えられる。

ここで「主観性判定テスト」の有効性を「雨だよ」という表現によって確かめたい。

(5) a . 雨ではない。(否定テスト)

- b . *雨だではない。(")
- c . *雨だよではない。(")
- (6) a . 雨か？(疑問テスト)
- b . *雨だか？(")
- c . *雨だよか？(")
- (7) a . 雨の日(連体修飾テスト)
- b . *雨だの日(")
- c . *雨だよの日(")
- (8) a . 雨だった。(過去テスト)
- b . *雨だだった。(")
- c . *雨だよだった。(")

以上の結果、「雨だよ」という表現のうち「雨」の部分は命題に属し、「だ」と「よ」の部分はモダリティに属することが確認された。

このテストで注意すべき点は、一見客観的な成分であるかのように見えても、実際にはそうでない場合があるということである。たとえば、(9) は適格な文であるため、一見「だろう」が疑問の対象になっているかのように見える。

(9) 雨だろうか。

しかし、この表現で疑問の対象となっているのは、「～だろう」の部分ではなく「雨」の部分である。その証拠に「雨」と「雪」を対比した文は成り立つが、「～だろう」と「～ (無形の確言形)」を対比した文は非文となる。

(10) 雨だろうか、雪だろうか。

(11) *雨だろうか、雨か。

「主観性判定テスト」の実施にあたっては、こうした点に注意する必要がある。

3 . 比況のヨウダと推量判断のヨウダ

3 . 1 ヨウダの用法

「ヨウダ」には比況、推量判断、例示、婉曲などの用法がある。

- (12) a . 顔の色艶を見ると、この人はまるで生きているヨウダ。(比況)
 b . 顔の色艶を見ると、この人はどうやら生きているヨウダ。(推量判断)
 c . たとえばピーマンのヨウナ緑黄色野菜は健康にいい。(例示)
 d . (車が来たのを見て)社長、どうやらお車が来たヨウデス。(婉曲)

(12a) は比況の例である。これは「この人」の死んでいることがすでに分かっている場面で使われる。「この人」に生きている人の持つ属性(「顔の色艶」)のあることを根拠にして、生きている人と似た様態にあることを述べた表現である。一方、(12b) は推量判断の例である。これは「この人」の生死を推量する場面で使われ、「この人」に生きている人の持つ属性(「顔の色艶」)のあることを根拠にして、「生きている」と推量判断したことを表す。

(12c) は例示の例である。緑黄色野菜の一例としてピーマンを挙げた表現で、緑黄色野菜とピーマンは上位語と下位語の関係になっている。例示の用法は「ピーマンのヨウナ緑黄色野菜」、「ピーマンのヨウニ栄養がある」のように、「ヨウナ+体言」や「ヨウニ+用言」の形でのみ使われ、「ヨウダ」の形では使われない。(12d) は婉曲の例である。これは実際には車が来たことを知っていても、あえて推量的な言い方によって、遠回して丁寧な物言いにした表現である。例示の用法は推量判断の延長として考えることができる。

ここで比況と推量判断の共通点と相違点を整理する。両者の共通点は、いずれもある事態Aと別の事態Bとが近接関係にあることを表す点にある。AとBの関係は次のように表される。

- (13) 根拠Xにより、AはB(の)ヨウダ。

(13) は、AとBがXという共通の属性を持つことを根拠に、AがBと近接関係にあることを表す。次の二つの表現は、いずれも「あの人」の歩き方が「一般的な男」の歩き方と同じであることを根拠に、「あの人」と「一般的な男」が近接関係にあることを表している。

- (14) a . あの歩き方を見ると、あの人はまるで男のヨウダ。(比況)
 b . あの歩き方を見ると、あの人はどうやら男のヨウダ。(推量判断)

一方、比況と推量判断の違いは、比況の場合には発話時点においてAがBでないことが分かっているのに対し、推量判断の場合にはそれが不明であるという点にある。事実、

(14a) の「あの人」は女であり、(14b) の「あの人」は性別不明である。

- (15) a . あの歩き方を見ると、あの女はまるで男のヨウダ。
b . *あの歩き方を見ると、あの男はまるで男のヨウダ。
c . *あの歩き方を見ると、あの性別不明の人はまるで男のヨウダ。
- (16) a . *あの歩き方を見ると、あの女はどうやら男のヨウダ。
b . *あの歩き方を見ると、あの男はどうやら男のヨウダ。
c . あの歩き方を見ると、あの性別不明の人はどうやら男のヨウダ。

(16a) が言えるとするれば、「あの女」は「あの女と思われた人」の意味となる。この場合、話し手は発話時点において「あの女」の性別に不審を抱いている。

ここで確認しておきたいのは、比況の「ヨウダ」と推量判断の「ヨウダ」が意味的に連続した表現であるということである。その証拠に、比況と推量判断のいずれか一方の解釈しかできない例がある一方で、どちらの解釈にもなりうる中間的な例も存在する。ある文の「ヨウダ」が比況なのか推量判断なのかは、共起する副詞の違いによって判断できる。すなわち「マルデ」と共起すれば比況、「ドウヤラ」と共起すれば推量判断である。次の(17)は比況の例、(18)は推量判断の例、(19)は中間的な例である。

- (17) a . あたりは真暗 濡れた毛布のせいで気持ちは悪いし手足は氷のよう (山岸涼子『スピックス』)
b . 濡れた毛布のせいで気持ちは悪いし手足はマルデ氷のヨウダ。
c . *濡れた毛布のせいで気持ちは悪いし手足はドウヤラ氷のヨウダ。
- (18) a . 久光は、これまでのいきさつから、このような動きに心おだやかならぬものがあったようだ。(毛利敏彦『大久保利通』)
b . *このような動きにマルデ心おだやかならぬものがあったヨウダ
c . このような動きにドウヤラ心おだやかならぬものがあったヨウダ。
- (19) a . ひんやりとした風の中に、微かに潮の香りを感じた。この半島では、町中をも海が包んでいるようだった。(吉本ばなな『TUGUMI』)
b . この半島では、マルデ町中をも海が包んでいるヨウダッタ。
c . この半島では、ドウヤラ町中をも海が包んでいるヨウダッタ。

(19) のような例の存在から、比況の「ヨウダ」と推量判断の「ヨウダ」は意味的に連続した表現であることが証明される。

以上、3.1 節では比況の「ヨウダ」と推量判断の「ヨウダ」が、「根拠 X により、A

はB(の)ヨウダ」という共通の意味を持つ表現であることを指摘した。

3.2 比況のヨウダと推量判断のヨウダの主観性の違い

比況の「ヨウダ」と推量判断の「ヨウダ」は連続した表現である。しかし、主観性の点で前者が客観的な性質を見せるのに対し、後者は主観的な性質を見せるという違いがある。このことを「主観性判定テスト」(否定テスト、疑問テスト、連体修飾テスト、過去テスト)によって確かめることにする。まず「否定テスト」から見ていく。

- (20) a . (「あの女の性質を確認する場面で」) あの女は男のヨウではない。
 b . *(「あの人の性別を推量する場面で」) どうやらあの人は男のヨウではない。

(20a)は「あの女」に男としての属性のないことを述べた文で適格となる。一方、(20b)は非文となる。「あの人」が男ではないと推量する場合には、否定の「ナイ」が「ヨウダ」の内側に来る。

- (21) どうやらあの人は男ではないヨウダ。

次に「疑問テスト」について見ていく。

- (22) a . あの女はまるで男のヨウですか？
 b . *あの人はどうやら男のヨウですか？

(22a)は「あの女」に男としての属性があるかないかを尋ねた文で適格となる。一方、(22b)が非文となるのは、推量判断というものの性質による。推量判断は発話時点における話し手の心的態度を表したものであるため、真偽の対象とはなりえないのである。

次に「連体修飾テスト」について見ていく。

- (23) a . まるで男のヨウナ女
 b . *どうやら男のヨウナ人

(23a)に示されるように、比況の「ヨウダ」は「B(の)ヨウナA」という形で連体修飾成分となる。比況の「ヨウダ」は、A、Bという別々のものにXという共通の属性を見つけ、それを根拠にAがBと似た性質を示すことを表した表現である。「猿のヨウナ顔」、「氷のヨウナ心」、「鈴を転がすヨウナ美しい声」、「見てきたヨウナ嘘の話」な

ども同様である。この A と B の関係が上位語と下位語の関係になり、A の特徴を B によって説明したのが例示の「ヨウダ」である。「東京のヨウナ大都会」、「サイダーのような飲み物」などがこれである。

一方、(23b) に示されるように、推量判断の「ヨウダ」は一般に連体修飾成分とはならない。しかし、次のような場合には連体修飾成分となるので注意が必要である。

- (24) 禎子は、本多良雄が夫について、もっと何か知っているような直感がした。(松本清張『ゼロの焦点』)
- (25) 「いや、つまるところです。年じゅう、暗いような感じがして重苦しい所です」(松本清張『ゼロの焦点』)
- (26) もっとも、その直後に数百年に一度の大震災が襲ってきたというのは、あまりにも偶然がすぎるような気もするが。(貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』)
- (27) 今年のクリスマスは雪が降るヨウナ予感がする。

これらに共通するのは、「ヨウダ」の後に「直感 / 感じ / 気 / 予感」という話し手の直感的な感覚を表す表現が続く点である。この「ヨウダ」は、(24) のように第三者の心的態度を表したり、(25) のように連体修飾成分となる場合には、客観的表現であることが明確である。しかし、(26) の「気がする」や(27) の「予感がする」のように、「発話時における話し手の心的態度」を表す場合には、「～ヨウナ直感がする / 感じがする / 気がする / 予感がする」全体がモダリティとして機能する。推量判断の「ヨウダ」は、こうした表現が短縮されて「ヨウダ」一語で表されるようになったものであると考えられる。

最後に「過去テスト」について見ていく。(28a)(28b) を見る限り、比況の「ヨウダ」も推量判断の「ヨウダ」もともに過去文の対象となるように思われる。

- (28) a . あの女はまるで男のヨウダッタ。
- b . あの人はどうやら男のヨウダッタ。

しかし、過去文に使われた「ヨウダ」は、過去における推量を表すという解釈よりも、過去における様態を表すという解釈が強くなる。

- (29) 母は憲一が三十六歳まで独身だったということにまだ不安を持っているようだった。(松本清張『ゼロの焦点』)
- (30) 野村浩子という臨床心理士は、すでに森谷千尋の多重人格障害についてかなり

詳しくつかんでいるようだったし、人間的にも信頼が置けそうだった。(貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』)

(29)は「まだ不安を持っている様子だった」という解釈となるし、(30)は「すでに森谷千尋の多重人格障害についてかなり詳しくつかんでいる様子だった」という解釈となる。推量判断の「ヨウダ」自体を過去文の対象とするには、「～(の)ヨウダと思った」のように引用文の中に入れる必要がある。⁶⁾

以上、3.2節では比況の「ヨウダ」が客観的な表現であるのに対し、推量判断の「ヨウダ」は主観的な表現であることを指摘した。

3.3 演繹推論と帰納推論

木下(1999)は、推量判断に「演繹推論」と「帰納推論」の二つの型のあることを指摘した。⁷⁾両者は次のように一般化できる。

演繹推論：「知識(pならばq)」とpから、qを導く

帰納推論：「知識(pならばq)」とqから、pを導く

木下は「ヨウダ」、「ラシイ」、「ニチガイナイ」などの推論の型を分析した結果、「ヨウダ」と「ラシイ」は「帰納推論」のみに使われ、「ニチガイナイ」は「演繹推論」と「帰納推論」の両方に使われることを明らかにした。この点で「ヨウダ」と「ラシイ」は「ニチガイナイ」から区別される。

(31) 「知識(無理な運転をする 事故が起きる)」

(32) 《演繹推論》(無理な運転をしているのを見て)

a. *事故が起きる{ヨウダ/ラシイ}

b. 事故が起きるニチガイナイ。

(33) 《帰納推論》(事故が起きたのを見て)

a. 無理な運転をした{ヨウダ/ラシイ}

b. 無理な運転をしたニチガイナイ。

「ヨウダ」を「ラシイ」から区別する特徴は、話し手の責任で判断を下すという意味が強い点にある。その証拠に次の場面で「ヨウダ」は使えるが「ラシイ」は使えない。

(34) a. {僕/彼}は君の話しを聞いたら何だか勇気が湧いてきたヨウダ。

b . { * 僕 / 彼 } は君の話しを聞いたら何だか勇気が湧いてきたラシイ。

(35) ライオンとトラではどちらが強いと思いますか。

a . どうもライオンのヨウダ。

b . * どうもライオンラシイ。

ここで「ヨウダ」の根拠について論じておきたい。「帰納推論」は眼前のqから不明のpを導き出す推論である。このとき「推論 (q → p)」によってpを導き出すためには、qがpの裏付けとなるに十分な根拠でなければならない。そうでなければ、「知識 (a → q)」や「知識 (b → q)」などが「知識 (p → q)」に優先して機能してしまうからである。これはある人の性別を推論する場合に、スカートを根拠に「女のようにだ」とは言えても、靴下を根拠に「女のようにだ」とは言いにくいのも同じである。

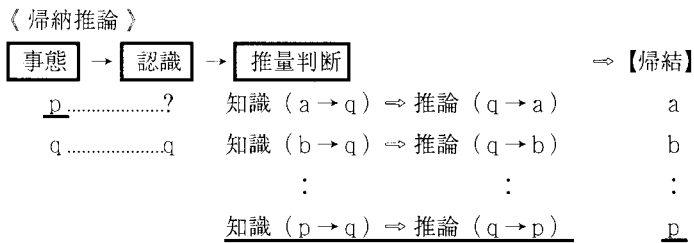


図 4 帰納推論の図

一方、「演繹推論」の場合には根拠についてそのような制約がなく、話し手が個人的に確信していることであれば、思い込みであっても言うことができる。

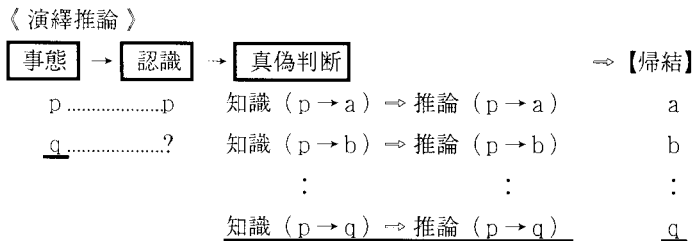


図 5 演繹推論の図

以上、3 . 3 節では推量判断の「ヨウダ」が「帰納推論」をすることについて論じた。

4. ヨウダとソウダ

次に「ヨウダ」と「ソウダ」の主観性の違いについて論じる。「ソウダ」は一般にモダリティ表現であるとされている。⁸⁾しかし、次の「主観性判定テスト」から証明されるように、「ソウダ」(厳密には「ソウ」の部分)は命題表現であると考えられる。

- | | | |
|-----------|-------------|-----------|
| (否定テスト) | : 雨が降りソウニナイ | おいしソウデハナイ |
| (疑問テスト) | : 雨が降りソウか | おいしソウか |
| (連体修飾テスト) | : 雨が降りソウナ気配 | おいしソウナ匂い |
| (過去テスト) | : 雨が降りソウダッタ | おいしソウダッタ |

「ソウダ」の意味について寺村(1984)は、「ある対象が、近くある動的事象が起こることを予想させるような様相を呈していること、あるいはある性質、内情が表面に現れていることをいう表現である」(p. 239)と定義した。(36)は性質・内情の例、(37)は動的事象の例である。

- (36) やさしそうな表情は女たちの流行。(中島みゆき『誘惑』)
 (37) 崩れそうな強がりは男たちの流行。(中島みゆき『誘惑』)

寺村は「ヨウダ」と「ソウダ」の違いについて、「先の予想のソウダと、推量のヨウダを比べると、まずソウダのほうは視覚的、直感的に見たままをいうのに対し、ヨウダのほうは、視覚、聴覚、その他の感覚により得た情報、あるいは周囲の状況も考慮に入れて推量した結果をいうという違いがある」(pp. 243 - 244)としている。寺村は二語とともにムードの表現と考えているが、「主観性判定テスト」の結果からも「ソウダ」は客観的な表現であると考えたほうがよい。

本研究では、「ソウダ」は前接する動詞や形容詞と一体となって、それ全体で一つの形容動詞として機能すると考える。「ソウダ」は兆候や様相の現れを表す形容動詞であり、決して推量表現ではない。その証拠に、単に眼前の様相を述べる文では推量の意味が入らない。

- (38) 人々はみな髪を光にすかして幸福そうにすれ違ってゆく。(吉本ばなな『ムーンライト・シャドウ』)
 (39) 夫は煙草をくわえて煙を吐き、目をけむたそうにしかめた。(松本清張『ゼロの焦点』)

- (40) 警察署を出ると、曇った空は、いまにも雨が降りだしそうだった。(松本清張『ゼロの焦点』)
- (41) ほほが夕陽に輝き、それは、まるで一刻ずつ姿を変えてゆくまぶしい夕空のようにはかない笑顔だった。白い歯も、細い首も、じっと彼を見つめる大きな瞳も、みんな砂や風や波音にまぎれて今にもさらりと消え入りそうだった。(吉本ばなな『TUGUMI』)
- (42) 立って、夫からの絵はがきをとりだした。紙が指から抜けて落ちそうであった。(松本清張『ゼロの焦点』)

推量の意味が感じられるのは、未実現・未確認の事態を推測する文脈である。

- (43) これで横綱への夢もどうやら実現しそうです。(NHK 総合「大相撲夏場所千秋楽」1999.5.23)
- (44) 私はびっくりして目を見開いてしまった。かなり歳は上そうだったが、その人は本当に美しかった。(吉本ばなな『キッチン』)
- (45) 「教習所ここにしようかと思って 家からも近いし設備もよさそうだし」(臼井儀人『クレヨンしんちゃん』)

しかし、この場合にも「ソウダ」自体は兆候や様相の現れを表すのみで、推量の意味は「横綱が実現しソウ(に思われる)」、「年が上ソウ(に見える)」、「設備がよさソウ(に思う)」のように表現上隠された部分が担っていると考えられる。その証拠に、これらの「ソウダ」は「実現しそうな横綱の夢」、「年が上そうな女」、「設備がよさそうな教習所」のように連体修飾成分になる。

「ヨウダ」と「ソウダ」の主観性の違いは、「が/の」交替テストからも明らかとなる。「が」と「の」は、「太郎は頭{が/の}いい子だ」のように入れ替え可能な場合もある。しかし、後に名詞性成分の続かない場合には、「太郎は頭{が/*の}いい」のように「の」が使えない。次の表現で「の」が使えないのはこのためである。

- (46) a . 今年のクリスマスは雪が降りソウダ。
b . *今年のクリスマスは雪の降りソウダ。
- (47) a . 今年のクリスマスは雪が降るヨウダ。
b . *今年のクリスマスは雪の降るヨウダ。

そこで「の」の後ろに名詞性成分「予感(がする)」を補ったところ、(48b)は適格

な文となった。これは大島（1999）が「主格の「の」は、当該の節が主節に対して構造的に“従”であることを明示する」（p. 37）と指摘しているとおり、「雪の降りソウ」が主節である「予感がする」に対して“従”となっているためである。

- (48) a . 今年のクリスマスは雪が降りソウナ予感がする。
 b . 今年のクリスマスは雪の降りソウナ予感がする。
 (49) a . 今年のクリスマスは雪が降るヨウナ予感がする。
 b . ?今年のクリスマスは雪の降るヨウナ予感がする。

ここで注目したいのは、(49b)は依然(49a)に比べて許容度が落ちるということである。この文法性の差は「ソウダ」と「ヨウダ」の主観性の違いに基づくと考えられる。すなわち、「ソウダ」は命題表現であるため容易に従属節の中に入るのに対し、「ヨウダ」はモダリティ成分であるためそれが困難なのである。一方、(49a)が適格となるのは、「今年のクリスマスは雪が降る」が主節として機能し、「ヨウナ予感がする」はそれ全体でモダリティ表現となっているためであると考えられる。

次に時制との関わりの違いについて論じる。(50)(51)において時の副詞の係り先を比較すると、「ヨウダ」と「ソウダ」では違いが見られる。

- (50) a . 昨日は雨が降ったヨウダ。
 b . 現在雨が降っているヨウダ。
 c . 明日は雨が降るヨウダ。
 (51) a . 昨日は雨が降りソウダッタ。
 b . 現在雨が降ってソウダ。
 c . 明日は雨が降りソウダ。

(50)の場合、時の副詞は「雨が降る」の部分と関わっており、「ヨウダ」とは関わっていない。そのため「*昨日は雨が降るヨウダッタ」は非文となる。一方、(51)の場合、時の副詞は「雨が降りソウダ」全体と関わっており、「ソウダ」の時制に影響を与えている。こうした事実からも、「ヨウダ」が命題の時制とは独立に機能するモダリティ表現であるのに対し、「ソウダ」は命題の時制の中に含まれた命題表現であることが証明される。

5 . ま と め

以上の考察の結果、推量判断の「ヨウダ」がモダリティとして機能するのに対し、「ソウダ」は命題として機能することが明らかとなった。ただし、厳密には「ソウ」の部分と「ダ」の部分では主観性に違いが見られる。このことを「雨が降りソウダ」を例に説明しよう。「雨が降りソウダ」を「雨が降りソウナ気配ダ」に置き換えた場合、「ソウ(ナ)」の部分は客観的な連体修飾成分となり、「ダ」の部分は話し手の確言的な判断を表す。したがって、「ソウ」の部分は命題として機能し、「ダ」の部分はモダリティとして機能することになる。

本研究の立場では、「[雨が降りソウ]ダ」や「[元気ソウ]ダ」と、「[雨]ダ」や「[元気]ダ」とは同じ文の構造を持つことになる。さらに、「[手が氷ノヨウ]ダ」、「[彼が行くベキ]ダ」、「[私がやるツモリ]ダ」も同じ文の構造を持つと考えられる。一方、推量判断の「ヨウダ」や「ニチガイナイ」は、「[雨が降る]ヨウダ」や「[雨が降る]ニチガイナイ」という構造を持つと考えられる。こうした違いは「雨が降りソウダ」が「[雨が降りソウ]かどうか」という問いに対する答であるのに対し、「雨が降るヨウダ」は「[雨が降る]かどうか」という問いに対する答であることから説明できる。

注

- 1) 「ヨウダ」には「比況」、「推量判断」、「例示」、「婉曲」などの用法があるが、特に断わらない限り、本研究では「推量判断」の場合を指すことにする。
- 2) 「ソウダ」には「雨が降りソウダ」のように連用形について「兆候や様相の現れ」を表すものと、「雨が降るソウダ」のように終止形について「伝聞」を表すものがある。このうち本研究では「兆候や様相の現れ」を表す「ソウダ」について考察する。
- 3) 本研究の「事態」には、「状態」(state)、「過程」(process)、「行為」(action)を含むものとする。
- 4) モダリティの構成要素として、心的態度、話し手、発話時点の3つがあるとする考え方は、中右(1980、1994)に基づく。「発話時点」は「持続的現在時」と区別して、特に「瞬間的現在時」を指す。
- 5) 仁田(1989、1991)の「言表事態めあてのモダリティ」と「発話・伝達のモダリティ」、および益岡(1991)の「判断系のモダリティ」と「表言系のモダリティ」も同様の観点から分けたものである。
- 6) なお、小説や戯曲など「語り物」の世界では、「~(ノ)ヨウダと思った」の意味で「ヨウダッタ」を使うことがある。「ラシカッタ/カモシレナカッタ/ニチガイナカッタ」も同様である。
- 7) これは木下(1999)の「演繹推論」と「蓋然性推論」を修正した考え方である。木下は「演繹推論」に「知識(qならばp)」から導かれるものと、「qならばp」から導かれるものがあるとした。これは木下が「カモシレナイ」と「ハズダ」を推論表現と捉えているためである。し

かし、「宝くじは当たるカモシレナイし、当たらないカモシレナイものだ」や「当たるハズの宝くじがはずれたなどの表現からも分かるように、「カモシレナイ」と「ハズ」は客観的な成分であると考えられる。したがって、「カモシレナイ」と「ハズ」を推論表現から除外すると、「演繹推論」は「知識（qならばp）」からのみ導かれると考えればよいことになる。

- 8) 寺村（1984）中島（1991）三原（1995）野田（1995）は「概言のモード」、仁田（1989、1991）は「判断のモダリティ」、三宅（1994）は「認識のモダリティ」としている。これに対し、森山（1989）は、「アスペクト的な意味に極めて近い。そもそも、連用形につくということ自体、意味的にも、形態的にも、前述のような認識的モード形式にあわない」（pp. 63 - 64）と論じ、小林（1980）も推量のモードゥスから除外している。ただし、森山も小林もそうした指摘にとどまっている。

参考文献

- 大島資生（1999）「現代語における主格の「の」について」『國語學』第199集 pp. 161-149（左28-40）
- 木下りか（1999）『文末における「真偽判断のモダリティ」形式の意味』名古屋大学博士学位論文
- 小林幸江（1980）「推量の表現及びそれと呼応する副詞について」『日本語学校論集』pp. 73-22
- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版
- 中右 実（1980）「文副詞の比較」国広哲弥（編）『日英語比較講座 第2巻 文法』pp. 157-219
大修館書店
- （1994）『認知意味論の原理』大修館書店
- 中島孝幸（1991）「不確かな様相 ヨウダとソウダ」『三重大学日本語学文学』第2号 pp. 26-33
- 仁田義雄（1989）「現代日本語文のモダリティの体系と構造」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』pp. 1-56 くろしお出版
- （1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 野田尚史（1995）「現場依存の視点と文脈依存の視点」仁田義雄編『複文の研究』pp. 327-351 くろしお出版
- 益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版
- 三原健一（1995）「概言のモード表現と連体修飾語」仁田義雄編『複文の研究』pp. 285-307 くろしお出版
- 三宅知宏（1994）「認識のモダリティにおける実証的判断について」『國語國文』第63巻第11号 pp. 20-34
- 森山卓郎（1989）「認識のモードとその周辺」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』pp. 57-74 くろしお出版

例文の出典

臼井儀人『クレヨンしんちゃん』双葉文庫 / 貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』角川ホラー文庫 / 松本清張『ゼロの焦点』中央公論社 / 毛利敏彦『大久保利通』中公新書 / 山岸涼子『スピックス』(『ハトシエプスト』より) 文春文庫ビジュアル版 / 吉本ばなな『ムーンライト・シャドウ』(『キッチン』より) 角川文庫、『TUGUMI』 中公文庫